

『正法眼蔵抄』口語訳の試み

— 仏 性 (四) —

伊 藤 秀 憲

第五段

震旦第六祖曹谿山大鑑禪師、そのかみ黄梅山に参ぜしはじめ、五祖とふ、^{(1)……}「なんぢいづれのところよりかきたれる。」六祖いはく、「嶺南人なり。」五祖いはく、「きたりてなにごとをかもとむる。」六祖いはく、「作仏をもとむ。」五祖いはく、「嶺南人無仏性、いかにしてか作仏せむ。」^{(2)……(1)}

この嶺南人無仏性といふ、嶺南人は仏性なしといふにあらず、嶺南人は仏性ありといふにあらず、嶺南人無仏性となり。いかにしてか作仏せむといふは、いかなる作仏をか期するといふなり。おほよそ仏性の道理、あきらむる先達すくなし。諸阿笈摩教および經論師のしるべきにあらず、仏祖の兒孫のみ単伝するなり。仏性の道理は、仏性は成仏よりさきに具足⁽⁵⁾せるにあらず、成仏よりのちに具足するなり。仏性かならず成仏と同参するなり。この道理よくよく参究功夫すべし、三二十年も功夫参学すべし。十聖三賢のあきらむるところにあらず。衆生有仏性、衆生無仏性と道取する、この道理なり。成仏以来に具足する法なりと参学する、正的なり。かくのごとく学せざるは、仏法にあらざるべし。かくのごとく学せずば、仏法あへて今日にいたるべからず。もしこの道理あきらめざるには、成仏をあきらめず、見聞せざるなり。このゆへに、五祖は向他道するに、嶺南人無仏性と為道するなり。見仏聞法の最初に、難得難聞なるは衆生無仏性なり。或從知識、或從經卷するに、きくことのよろこぶべきは衆生無仏性なり。一切衆生無仏性を見聞覚知に参飽せざるものは、仏性いまだ見聞覚知せざるなり。六祖もはら作仏をもとむるに、五祖よく六祖を作仏せしむるに、他の道取なし、善巧なし、ただ嶺南人無仏性といふ。しるべし、無仏性の道

取聞取、これ作仏の直道なりといふことを。しかあれば、無仏性の正当恁麼時、すなはち作仏なり。無仏性いまだ見聞せず、道取せざるは、いまだ作仏せざるなり。

六祖(1)いはく、「人有南北なりとも、仏性無南北なり。」この道取を挙して、句裏を功夫すべし。南北の言、まさに赤心に照顧すべし。六祖道得の句に宗旨あり。いはゆる、人は作仏すとも仏性は作仏すべからずといふ一隅(6)の構得あり。六祖これをしるやいなや。四祖・五祖の道取する無仏性の道得、はるかに導礙の力量ある一隅(7)をうけて、迦葉仏および釈迦牟尼仏等の諸仏は作仏し(8)伝法するに、悉有仏性と道取する力量あるなり。悉有仏の有、なむ(9)ぞ無無の無に嗣法せざらむ(9)。しかあれば、無仏性の語、はるかに四祖・五祖の室よりきこゆるなり。このとき、六祖その人ならば、この無仏性の語を功夫すべきなり。有無の無はしばらくおく、いかならむかこれ仏性と問取すべし、なにものかこれ仏性とたづぬべし。いまの人も、仏性とききぬれば、さらにいかなるかこれ仏性と問取せず、仏性の有無等の義をいふがごとし。これ倉卒なり。しかあれば、諸無の無は、無仏性の無に学すべし。六祖の道取する人有南北、仏性無南北の道、しづかに拈放すべし。をろかなるやから(11)をもはくは、人間には質礙すれば南北あれども、仏性は虚融にして南北の論におよばずと六祖は道取せりけるかと推度するは、無分の愚蒙なるべし。この邪解を抛却して、直須勤学すべし。

此問答打任タル様ニ聞ユ、然而祖師問答、只尋常ノ詞ナルヘカラス、就中五祖六祖ノ問答、定有子細ニ歟、所詮此問答仏法上ト可ニ心得、其上嶺南イカ程ノ大国ニテカアルラム、難シ知、此嶺南人無仏性ト心得ムモ、仰ニ世情ニモ難ニ心得カリヌヘシ、而此嶺南人無仏性ト云、嶺南人ハ仏性ナシト云ニアラス、嶺南人ハ仏性アリト云ニ非ス、嶺南人無仏性也ト

この問答は、普通一般の「問答の」ように受け取ることができ。しかし、祖師の問答は、決して普通のことばであるはずがない。特に、五祖と六祖との問答には、きつと「問答が行なわれるだけの」理由がある。結局、この問答は、仏法の上「での問答」と理解すべきである。更に、嶺南はどれほどの大国であるのだろうか。知ることは難しい。この「嶺南人無仏性」と「いうことばを」理解するのにも、世俗の考えによっても理解することは、きつと難しいはずである。「なぜならば、一切衆生悉有仏性」であるのに、どうして嶺南人には仏性がないのかと

積ツキ之、是ハコノ無ムヲ世間ノ無ムニココロエテ、
 仏性ノ上ニ仰テ、無ムソ有ソ(一〇九a)ト非ヒ論、
 只此嶺南人無ム仏性トナリ、此無ムノ詞先
 談ワタ旧コリヌ、今更非ヒ可ク疑ギ、イカニシテカ作ス仏
 セムト云ハ、イカナル作ス仏ヲカ期キスルト云也
 ト云云、此作ス仏ノ上ニ又イカナル作ス仏ヲカ期
 スヘキトナリ、但此道理ノ上ニハ、又イカナル
 作ス仏モアルヘシ、悉有シノ作ス仏モアルヘシ、有
 仏性ノ作ス仏モアルヘキ也、又仏性ハ成ス仏ヨリ
 サキニ具足セルニアラス、成ス仏ヨリ後ニ具足
 スルナリト云云、此条大ニ不審也、仏性ハ具縛クワク
 凡夫具足セル法也、是ヲ修シアラワス時成ス仏
 ス、然者仏性ハサキヨリ具足(一〇九b)ス
 ル法也、而今御詞不レ被レ心得、但如此皆人
 心得タリ、其邪見ヲ破レセム料レノ御積也、仏性
 ノ道理前後際断セリ、如此ハ仏性ノ道理タニ
 モヲトシ居テ心得ヌレハ、縦ツト前ト云後ト談ス
 レトモ、仏性上ノ前後サラニ不レ可レ有ニ差別
 事也、十聖三賢ノアキラムル所ニアラスト
 云云、断惑証理ノ菩薩等イカニカ争レ被レ明サルヘキ、
 然而十聖三賢トテ次位階級ヲ立ル程ニテハ、
 イカニモ此道理ハ不レ可レ被レ談事也、

いうことになるからである。」そうではあるが、「この嶺南人無ム仏性といふ、嶺南
 人は仏性なしといふにあらざ、嶺南人は仏性ありといふにあらざ、嶺南人無ム仏性
 〔と〕⁽³⁾なり」と註釈された。これは、この「無」を、世間〔で用いるところの存
 在しないという意味〕の無のように理解して、仏性の上に負わせて、「仏性が」
 無い、「或いは」有ると論じるのではない。ただこの「嶺南人無ム仏性となり」〔とあ
 る。〕この「無」のことばは、以前説きふるされた。今更疑うべきではない。「い
 かにしてか作ス仏せむといふは、いかなる作ス仏をか期するといふなり」とある。こ
 の「作ス仏」(成ス仏)の上で、その上どのような仏となるうとするのかというのであ
 る。しかし、この道理の上では、また、どのような作ス仏もあるはずである。悉有
 の作ス仏もあるはずである。有シ仏性の作ス仏もあるはずである。また、「仏性は成ス仏
 よりさきに具足せるにあらざ、成ス仏より後に具足するなり」とある。「このくだ
 りは、はなはだ疑問である。仏性は煩惱に縛られている凡夫が具えている法であ
 る。これを修行しあらわすとき成ス仏する。そうであるならば、仏性は先より具え
 ている法である。ここのおことばは理解できない。」もつぱらこのようにすべて
 の人は理解している。「これは」その邪見を破すための御註釈である。仏性の道
 理は、前後際断している〔と〕いうことである。このように、仏性の道理だけでも
 きちんと理解したならば、たとえ「前」と言い「後」と説いても、仏性の上の前
 後であつて、決して区別があるはずがないこと〔がわかるの〕である。「十聖三賢
 のあきらむるところにあらざ」とある。惑(煩惱)を断じて理(真理)を証って
 いる菩薩等は、どうして「仏性の道理が」明らかにできないのだろう。しかし、
 十聖(十地)三賢(十住・十行・十回向)といえども、次位階級を立てるほどのとこ
 ろにおいては、たしかにこの「仏性の」道理は説かれるはずがないことである。

衆生有仏性、衆生無仏性ト道取スル、此道理
(一一〇a) 也云云、此条無別子細、成仏以来
具足スル法也ト参学スル、正的也云云、返返
モ成仏ヨリサキニ具足スト云見解ヲ被嫌也、
見仏聞法ノ最初ニ、難得難聞ナルハ衆生無仏
性也、或從知識、或從經卷スルニ、聞事ノヨ
ロコフヘキハ衆生無仏性也云云、返返モ衆生
無仏性ノ詞ヲ被讚嘆也、其故ハ打任テハ仏
性上ニ尋常ノ無有ヲ置テ心得ル常儀也、而
此有無ヲ仏性ノ上ニ心得テ、有モ無モ仏性也
ト心得ル分カ、イカニモ非祖門相伝儀者難
見聞所ヲ(一一〇b) 如此被述也、

六祖曰、人有南北ナリトモ、仏性無南北也、此
道取ヲ挙シテ、句裏ヲ功夫スヘシ云云、是ハ
六祖ノ人有南北、仏性無南北ト被仰タルハ、
人ニコソ南北アレ、仏性ニハ不可有南北
ト被仰タル様ニ被心得、実ニサル分モヤア
リツラム、六祖樵夫ノ昔、市ニテ応無所住而
生其心ノ句ヲ聞テ被發明タリ、然而参五
祖、神秀ノ偈ヲ破シテ後コソ伝法附衣セラレ
タリシカハ、只道心ノ發明許ニテ、真実其時
法ヲ被明(一一一a) タル分モヤナカリツ
ラム、然而猶六祖ヲウケラレテ此句ノ裏ニテ
モ赤心ニ照顧スヘシトアリ、随次ニ、六祖

『正法眼蔵抄』口語訳の試み(伊藤)

「衆生有仏性、衆生無仏性と道取する、この道理なり」とある。このくだりは、別にとりたてて論じることではない。「成仏以来具足する法なりと参学する、正的なり」とある。繰り返し「(仏性は)成仏よりさきに具足す」という見解を斥けられるのである。「見仏聞法の最初に、難得難聞なるは衆生無仏性なり。或從知識、或從經卷するに、きくことよろこぶべきは衆生無仏性なり」とある。繰り返し「衆生無仏性」のことばを讚嘆されるのである。そのわけは、普通一般には、仏性の上に、普通の「有る、無い」という意味の「有無をにおいて、(仏性が有る、仏性が無いと)理解するのが、常の(理解の)仕方である。しかし、この有無を仏性の上で理解して、有も無も仏性であると理解する様が、確かに仏から祖師へ相い伝えるところという仕方ではなければ、見聞することは難しいということ、このように述べられたのである。

「六祖曰、人有南北なりとも、仏性無南北なり。この道取を挙して、句裏を功夫すべし」とある。これは、六祖が「人有南北、仏性無南北」とおっしゃったのは、人間には「出身地によって」南と北「の区別」があるが、仏性には南北「の違いなど」あるはずがないとおっしゃったように理解される。実に、そのよに理解することも確かにあるだろう。六祖が樵夫であった昔、市で『金剛経』の「応無所住而生其心」(まさに住する所なくして其の心を生ぜよ)の句を聞いて發明された。しかし、五祖に参じて、神秀の偈を破して後に伝法附衣されたのであるから、『金剛経』の句を聞いたときは「ただ道心の發明だけで、真実その時法を明らかにめられた様子もなかったであろう。そうではあるが、やはりなんといっても六祖を嗣がれたので、この「人有南北、仏性無南北」の句の内容においても、「赤心に照顧すべし」とある。したがって、次に「六祖道得の句に宗旨あり。い

道得ノ句ニ宗旨アリ、イハユル人ハ作仏ストモ仏性ハ作仏スヘカラスト云一隅ノ構得アリ、六祖コレヲシルヤイナヤ云、此六祖ノ人有南北仏性無南北ト被仰タル詞ニ、人ハ作仏ストモトアル人カ、ヤカテ仏性ナレハ、人ハ作仏ストモト云道理アリ、仏性ハ仏性ナレハ、不可作仏ト云又道理アリ、不可背此理、故此詞ノ裏、カカル道理アリ、是ヲバ六祖シルヤ否トウケラ(一一一b)ルル也、又四祖五祖ノ道取スル無仏性ノ道得、ハルカニ導礙ノ力量アル一隅ヲウケテ、迦葉仏及釈迦牟尼仏等ノ諸仏ハ作仏シ伝法スルニ、悉有仏性ト道取スル力量アルナリト云云、此御詞返返ニ聞ユ、其故ハ、迦葉仏釈迦牟尼仏ノ説ヲウケテコソ、次第代祖師等モ法ヲ被伝、四祖五祖ノ道取セル無仏性ノ道得、ハルカニ導礙ノ力量アル一隅ヲウケテ、迦葉釈迦等ノ諸仏作仏シ伝法シテ悉有仏性ノ言ヲ道取ストアル(一一一a)事、返返不被心心得、然而仏祖ノ皮肉ノ所通、此詞今更非不可驚、迦葉釈尊仏祖等ノ皮肉更ニ不可有勝劣前後、故此道理現前スル也ト可心得也、又悉有ノ有、ナムソ無無ノ無ニ嗣法セサラムト云云、悉有ノ有如此談セムニ、無ノ道理何嗣法セサラムトナリ、又コノ時六祖ソノ人ナ

はゆる、人は作仏すとも仏性は作仏すべからずといふ一隅の構得あり。六祖これをしるやいなや」とある。この、六祖が「人有南北、仏性無南北」とおっしゃったことばによって、「人は作仏すとも」とある「人」が、そのまま仏性であるので、「人は作仏すとも」という道理がある。仏性は仏性であるので、「作仏すべからず」という道理もまたある。「この道理は」この「人は作仏すとも」という道理にそむくはずがない。だから、この「人有南北、仏性無南北」のことばのうち、このような道理がある。これを、「六祖しるやいなや」と応じられるのである。また、「四祖・五祖の道取する無仏性の道得、はるかに導礙の力量ある一隅をうけて、迦葉仏および釈迦牟尼仏等の諸仏は作仏し伝法するに、悉有仏性と道取する力量あるなり」とある。このおことばは、何度考えても逆であるように思える。そのわけは、迦葉仏・釈迦牟尼仏の説をうけて、順々に代々の祖師等も法をお伝えになったのである。「そうであるのに」「四祖・五祖の道取」される「無仏性の道得、はるかに導礙の力量ある一隅をうけて、迦葉(仏および)釈迦(牟尼仏)等の諸仏(は)作仏し伝法」して、「悉有仏性」のことばを「道取す」とあることは、何度考えても理解できない。そうではあるが、「これは」仏祖の皮肉が通じるところ「を述べられたのであって」、このことばは、今さら驚くべきではない。迦葉仏・釈尊・仏祖等の皮肉は、決して勝劣・前後があるはずがない。だからこの道理が現われるのであると理解すべきである。また、「悉有の有、なむぞ無無の無に嗣法せざらむ」とある。「悉有の有」をこのように説くときに、「この有は、無無の」無の道理を「なむぞ……嗣法せざらむ」(どうして嗣法しないのだから)というのである。「無仏性の無」といえば、仏性と無と二つのように受け取られるから、「無無の無」というのであって、この無の道理を「悉有の有」

ラハ、コノ無仏性ノ語ヲ功夫スヘキ也トアリ、是ハ六祖ノ有無ノ無ハシハラクヲク、イカナムカコレ仏性ト問取スヘシ、何物カコレ仏性ト可尋トアリ、是ハ六祖ニカハリテソノ時ハナト如此タ(一一二b)ツネラレサリケルソト也、但是モ六祖ノ御詞ノ不及シテ如此被積ニテハ不可有歟、然而一分ノ道理ノ一筋ヲ被開演也、今ノ人モ、仏性ト聞ヌレハ、サラニイカナルカ是仏性ト問取セス、仏性ノ有無等ノ義ヲ云カ如シト云云、実ニモ仏性トハ談スレトモ、只有無等ノ義ヲハトカク談スレトモ、仏性ハサレハイカナル物ソト云事ヲサタスル事ナシ、故倉卒也ト被嫌也、諸無ノ無ハ無仏性ノ無ニ学スヘントアリ、尤可然、只無ト聞ハ有無ヲ凡夫ノ見ニノミ心得、(一一三a)無ト談セム詞ヲハ無仏性ノ如ク可学トナリ、撈波子トハ、只ネムコロニ功勞スル躰詞也、ヲロカナルヤカラヲモハクハトテ被見解無別子細、如文凡夫ノ僻見ヲ被舉也、

今嶺南人此嶺南人ハ解脫嶺南人ナリ、無仏性詞ニテ仏法ヲトクコト、タトヘハ一法ワツカニ通スレハ万法共ニ通ストイフコレナリ、タタシ文ハ執見ニヨルトイフ、マコトニ心得ル方非一、以三世間ノ、セムツアハス浅名一顯ニシカク仏法深号ニシカクヨリ可ニ参学、依報正

『正法眼藏抄』口語訳の試み(伊藤)

はうけつぐのである。」また、「このとき、六祖その人ならば、この無仏性の語を功夫すべきなり」とある。これは、六祖が「有無の無はしばらくおく、いかならむかこれ仏性と問取すべし、なにものかこれ仏性とたづぬべし」とある。これは、六祖にかわって「道元禪師が」、その時、なぜこのようにたずねることが出来なかったのかとおっしゃったのである。但し、これも、六祖のおことばが及ばなくて、このように註釈されるのではあるはずがない。そうではあるが、わずかな道理のひとつを展開して説き明かされたのである。「いまの人も、仏性とききぬれば、さらにいかなるかこれ仏性と問取せず、仏性の有無等の義をいふがごとし」とある。まことに、仏性と説くけれども、「また」ただ有無等の意味をあれこれ説くけれども、仏性は一体どのようなものかということをと、とりあげて論じることがない。だから「倉卒なり」と斥けられるのである。「諸無の無は、無仏性の無に学すべし」とある。全くその通りである。ただ「無」と聞くならば、有無を凡夫の見方でのみ理解する(のではなく)、「無」と説くことばを、「無仏性」(「の無」のように学ぶべきだ)というのである。「撈波子」とは、単に熱心に骨を折って仕事をするというような意味のことばである。「をろかなるやからをもはくは」といつて出された見解は、別にとりたてて論じることばはない。文のように、凡夫の僻見をあげられたのである。

今、「嶺南人」この嶺南人は解脫した嶺南人である。無仏性」のことばによって、仏法を説くことは、たとえば「一法わずかに通ずれば万法共に通ず」という、これである。ただし、文は自分の心に固執した見解によ「って読まれ」という。まことに、理解の仕方は一つではない。世間の浅名で仏法の深号をあらわすこと

報一ツツツヲトクニ、今一方ノコル事ナシ、仏トトケハ衆生モアラ(一一三b)ハレ、嶺南人トモトケハ無仏性ヲモ心得ヘシ、聞ニ有ニ漸頓機、漸ニハ六度万行ノ法ヲ修シテ、菩薩ノ階級ヲ経、頓ニハヤカテ成仏ヲアラハスナリ、今ノ作仏ヲモトムトイフ、直ニ尋作仏ナリ、サレハ衆生ト成仏トハ如昨日夢トトク本来ノ仏ト云事ヲシラスシテ、衆生ト仏トヲ両方ニヨキテ衆生成仏スト談スルコトヲ、昨日ノ夢ノ如シトトク也、非実敗種ハイ二乗無仏性トキラハルレトモ、始終ステラレス、法華ノトキハ彈呵淘汰ノ調熟ヲ経テ、機ヲ一円ニ調ルモノナリ、凡者衆生仏法ヲ聞ニ得失アルヘシ、得トイフハ善悪ノ法ヲ差別シテ、イカサマニモ魔悪向善スルホトノ身ニナル、是得ナリ、(一一四a)イハムヤ仏性ノ有無ヲ心得ハコレ成仏也作仏也、尤得トイフヘシ、失ト云ハ一切衆生悉有仏性トキク、何事カ仏性ニアラサルト云テ、スヘテ悪ヲキラハヌコレ失也、

イカニシテカ作仏セムト云、此上ハ仏性ハ已サタマリヌ、作仏ノ事ヲ云ニ、イカナル作仏ヲカ期スルト云ハ、阿弥タトナラム、薬師トナラムトニハアラス、作仏ノスカタイカニト

から「まず」参学すべきである。依報(環境)と正報(身心)の一つずつを説いても、今一方が残るといふことはない。「仏と衆生とは異なるものではないから」仏と説けば衆生も現われ「るように」、「嶺南人」と説けば「無仏性」をも理解すべきである。聞くところ、「人には」漸と頓の素質があつて、漸「の素質の者」は、六度万行(すべての善行の根本である六波羅蜜の行)の法を修して菩薩の階級を経て「成仏を現わし」、頓「の素質の者」は、そのまま成仏を現わすのである。この「作仏をもとむ」といふのは、直ちに尋作仏である。そうであるから、衆生と成仏とは、昨日の夢のようであると説くハ本来が仏であるということを知らないで、衆生と仏とを両方において、衆生が成仏すると説くことを、昨日の夢のようであると説くのである。真実ではないからである。V。「仏は」敗種(成仏できない)二乗は無仏性であると斥けられるけれども、結局はお捨てにならない。法華時には、彈呵(方等時)淘汰(般若時)の調熟「の段階」を経て、相手を純一なる円教『法華経』の一仏乘にまとめるのである。世間一般の者、即ち衆生が、仏法を聞く時に、得失があるはずである。得といふのは、善法と悪法とを区別して、ともかく、悪をやめて善に向かうほどの「行いをなす」身体になる。これが得である。ましてや、仏性の有無を理解することは成仏であり、作仏である。いかにも得と言ふべきである。失といふのは、「一切衆生悉有仏性」と聞く。「だから」どんなことが仏性ではないのか、「すべてが仏性である」といって、全く悪を斥けないのは失である。

「いかにしてか作仏せむ」とある。「無仏性(無である仏性)であるから作仏する必要はない。だから」このうへは、仏性はすでに定まった。作仏のことを言うのに、「いかなる作仏をか期する」と言うのは、阿弥陀仏となろう、薬師仏となろうということではない。「作仏」のすがたが「いかに」と説かれるのである。

トカルル也、無仏性ノ詞ノ時作仏ハステニア
ラハレタリ、サアラムニハイカナル作仏ヲカ
期スルト云ナリ、期スヘカラサルユヘニ、(一
一四b)

嶺南人無仏性トイフ詞ヲ、仏性ナシトクニ
ハアラストトカルル事ハ、仏性空故所以言無
ノ無ト心得ルナリ、ユヘニ嶺南人無仏性トナ
リトトカルル也、

仏性成仏ヨリサキニ具足スルニ非ス、成仏ヨ
リ後ニ具足スル也ト云、余門ニハ、衆生ニハ
無始ヨリ仏ニナルヘキ性具足ス、シカルニ知
識ニ随テ凡悩ヲ断シ理ヲアハスヲ成仏トハ云
也、是則仏ノ性ハサキヨリ具ス、仏ニナル事
ハ後也ト談スル事ヲキラヒテ、衆生ノ内外則
仏性ノ皮肉ナリ、(一一五a)又仏ト性ト内
外ニアラス、前後ニアラサル義ヲアラワス
也、具足スト云スカタハ、仏性ノ全面ヲモテ
具足ト云、成仏ノ全面ヲモテ具足ト云、彼是
具足ノ具足ニアラス、仍同参トツカフナリ、
成仏ヨリ前後トイフハ、前三三後三三ヲ云
也、前後ニカカハル前後ニテハナキ也、成仏
以来ニ具足スル法ナリト云ハ、成仏前後ナシ、
始終ナシ、ユヘニ以来トツカフモイツレノ程
トサササル心ナリ、成仏与ニ仏性ニ不可異、

『正法眼蔵抄』口語訳の試み(伊藤)

「無仏性」のことばのとき、「作仏」はすでにあらわれている。その時には、「いかなる作仏をか期する」というのである。「いかなるも作仏であって」期すべきではないから。

「嶺南人無仏性」ということばを、仏性がないと説くのではない(「仏性なしといふにあらず」と説かれることは、「第四段の五祖のことばの」)「仏性空故、所以言無」(仏性空なる故に、所以に無と言ふ)の無と理解する(「即ち、仏性をそのまま無という」)のである。だから、「嶺南人無仏性となり」と説かれるのである。

「仏性」は「成仏よりさきに具足せらるにあらず、成仏よりのちに具足するなり」とある。余門では、衆生には無始より仏になるべき性が具足しており、そうであるから、知識に随って煩惱を断じ、理をあらわすことを成仏というのである。このことばはすなわち、仏の性は前からそなわっており、仏になることは後であると説くことを斥けて、衆生の内外がそのまま仏性の皮肉であり、また仏と性とは、内と外ではない、前と後ではないという道理をあらわすのである。「具足す」という様は、仏性の全体を「具足」というのであり、成仏の全体を「具足」というのであって、彼是具足の具足ではない。「仏性と成仏とは同時にある。」だから「同参」とつかうのである。「成仏よりさき」「成仏よりのち」というのは、前三三後三三をいうのである。前後に関わる「さき」「のち」ではないのである。「成仏以来に具足する法なり」というのは、成仏に前後はない。始めも終りもない。だから、「以来」とつかうのも、どれほどと指摘しない意味である。成仏と仏性とは異なるはずがない。

成仏⁽¹⁵⁾已来ニ具足スルト云ハ、如来常住無有變易ノ心也、世間ニハ仏性ハ理ニ具足シテ、成仏ノ(一一五b)トキアラハルヘント思ツルヲ、衆生ヲ仏性トイフトキ、無變易儀ナリ

同參ト云ハ、又成仏与ニ仏性ニ同セシムルニテハナシ、成仏ヨリサキモ後モ同ナルヘキナリ、前トイフ詞無ニ差別ニハ仏性ノ道理也、

十聖三賢ノアキラムル所ニアラスト云、此十聖三賢等ハ、次第ノ階級ヲ置、等覺ノ菩薩^{ササ}猶期ニ妙覺位、能所勝劣アル故不及也、タトヘハ国王大臣^シ種姓高貴ニ才学マサリタレトモ、仏法ヲ不知、イヤシキ民ナレトモ、出家求道シテ知識ニ(一一六a)随テヤスク仏法ヲシル、是程事也、ユヘニ十聖三賢ノ非^レ所^レ明^レト云也、又十聖三賢モ此道理ヲ学スト云方ニテハ不^レ及ト云ヘキニアラス、

人有南北仏性無南北ト云、人ト仏性ト南北有無同理也、皆仏性也、

人仏性、有仏性、南仏性、北仏性、無仏性也、人ハ作仏ストモ仏性ハ作仏スヘカラスト云ハ、作仏スヘシ又スヘカラストイフモヲナシタケナリ、人モ仏性モ作仏モ各別ノ法ナルヘカラス、ユヘニ仏性作仏スヘカラスト云、人ヲユルシテ作仏セシムル事ハ、上ハ(一一六

「成仏⁽¹⁵⁾以来に具足する」というのは、「第一段の」「如来常住、無有變易」(如来常住にして、變易有ること無し)の意味である。世間では、仏性は理に具足して、成仏のときあらわれるはずであると思つてゐるが、衆生を仏性というときには、變易がないということである。

「同參」というのは、特に成仏と仏性とを同じにさせるのではない。「成仏よりさき」も「のち」も同じであるはずである。「さき」「のち」ということばには区別がないのは、仏性の道理である。

「十聖三賢のあきらむるところにあらず」とある。この「十聖三賢」等は、次第の階級をもうけ、等覺位の菩薩はまだ妙覺位をねがう。能所勝劣があるから「妙覺」には及ばないのである。例えば、国王や大臣は、種姓が高貴で才学がすぐれていても仏法を知らない。賤しい民であっても、出家求道して知識に随つて、容易に仏法を知る。これほどのことである。だから「十聖三賢のあきらむるところにあらず」というのである。また、「十聖三賢」もこの「仏性の」道理を学ぶという点では、及ばないというべきではない。

「人有南北、仏性無南北」とある。「人」と「仏性」と「南北」「有無」は同じ理である。みな仏性である。

人仏性・有仏性・南仏性・北仏性・無仏性である。「人は作仏すとも仏性は作仏すべからず」とあるのは、「作仏すべし」、また「すべからず」というのも同じほどのことである。「人」も「仏性」も作仏も各別の法であるはずがない。だから「仏性」「は」作仏すべからず」というのである。「人」を認めて「作仏」させることは、うわべは「人有南北、仏性無南北」といったときにその通りで、「人

b) 人有南北仏性無南北ト云ツルトキニソノ
トヲリニテ、人ハ作仏ストモ仏性ハ作仏スヘ
カラスト云也、人モ仏性モ有無モ南北モ所詮
仏性ノ一面両面也、

凡悩ヲ断シテ菩提ヲ証ス、凡悩ヲ断セスンテ
菩提ニ入ル、凡悩ヲモ不_レ断、涅槃ニモ不_レ入
トトク此心ナリ、

無_レ無_レ無_レノ事、有_レヲ無_レトナシ、無_レヲ有_レト云ハ
ムニハアラス、有_レト無_レトタケラヒトシト云ハ
ム為ニ、無_レ無_レ無_レニ嗣法セサラムヤト云也、⁽¹⁶⁾
有_レ無_レ無_レハ暫_レヲク、イカナラムカ是仏性ト
云、此問ハヤカテ無_レヲ仏性ト説心也、イカナ
ラムカト(一一七a)云ハ、何姓ト云程事也、

還_レ我_レ仏性来ノ心地也、無_レノ字ヲアキラムル道
理ナリ、

撈_レ波子ハ水器也、タトヘハシタミコシナムト
スル心地也、

此段ノ意旨⁽¹⁷⁾アキラケシ、知識ノ詞ヲマツヘカ
ラス、其故ハ、五祖曰⁽¹⁷⁾汝何所ヨリカキタレル
ヨリ、嶺南人無_レ仏性イカニシテカ作_レ仏セムマ
テノ重重問答アルヲ、世間ノ詞ニ仰_レテキク

は作_レ仏すとも仏性は作_レ仏すべからず」というのである。「人」も「仏性」も「有
無」も「南北」も、結局仏性の一面・両面である。

煩惱を断じて菩提を証る。煩惱を断じないで菩提に入る。煩惱をも断じない、
涅槃にも入らないと説くのはこの意味である。

「無_レ無_レの無」のことは、有を無とし、無を有と言おうとするのではない。有と
無と同じほどであるというために、「無_レ無_レの無に嗣法せざらむ」というのである。

「有_レ無_レの無はしばらくおく、いかならむか是_レ仏性」とある。この問は、そのま
ま無を仏性と説く意味である。「いかならむか」というのは、「第四段の」「何姓」
というほどのことである。「いかならむか」は、「何姓」の「何」と同じく疑問
ではなく不定を表わしており、「いかならむか是_レ仏性」は、「いかなるも仏性」と
いうことである。」

「第二段の」「還_レ我_レ仏性来」(我に仏性を還し来れ)の気持である。無の字を明ら
かにする道理である。

「撈_レ波子」は水器である。たとえば、しずくをたらして漉してしまったとする
心地である。

この段の意旨は明らかである。知識のことばをまっぴはいけない。そのわけ
は、「五祖とふ、なんぢいづれのところよりかきたれる」より、「嶺南人無_レ仏性、
いかにしてか作_レ仏せむ」までが、たびたび繰り返して問答があるのを、世間のこ
とばとして聞いても、一応は理解できるであらうけれども、五祖のおことばに

モ、一方ハ被^レ心得^ニヌヘケレトモ、五祖ノ御詞ニ嶺南人無^レ仏性トアルコソ大ニ動執スレ、ソノ故ハ六祖ステニ作^レ仏ヲ求^レト被^レ仰、無^レ仏性ノ人争^レ作^レ仏トイフ詞ヲモシラム、(一一七b)イハムヤ求^レテ五祖ヘモ不^レ可^レ参^一、嶺南人サノミ争^レ無^レ仏性ノモノノミアツマルヘキ^二、此事不^レ心得、カカラムニツキテハ心得ヘキ所アマタアリ、ハシメ悉有^ノ衆生トイヒ仏性トキキシヨリ、コノ有^ノ字世間ノコトクナシ、第二段ノ欲知ト云モ当知ト心得、若至トイヒ不至トイフ、仏性ノ現前ト心得フ、超越因縁脱^レ体^ニ仏性ナムトキク、第三段ニ仏性海ヲハ山河大地皆依建立、三昧六通由^レ茲^ニ発現トトキテ、海ヲハ仏性海ト談シ、山河トトク、皆依ハ全依也トイヒ、建立也正当恁麼(一一八a)時トヨヒイタシテハ、山河大地也トイフ、驢^レ馬^レ鬣^レヲサシテ仏性ヲミルトイフ、六神通トアケテハ前三三後三三ト体脱ス、第四段ニハ四祖汝何姓ト問ヒ、五祖姓即有^レ不是常姓ト答、祖^レ又^レ是^レ何姓ト問ヒ、五祖^レ仏性ト答シ、祖^レ又^レ汝^レ無^レ仏性ト答シマシマス、有^レ無^レノタケ已前一一ニ顯然也、何^レノ疑^レヲカノコスヘキ^三、ソノ上嶺南人ハ仏性ナシトイフニアラス、嶺南人ハ仏性アリト云ニアラス、嶺南人

「嶺南人無^レ仏性」とあるのは、大いに「これまでの自分の考えに」迷って離れられない。そのわけは、六祖はすでに「作^レ仏をもとむ」とおっしゃった。無^レ仏性の人^レがどうして作^レ仏といふことを知^レっているのだろうか。ましてや「自^レから」求めて五祖へも参^レじるはずがない。これが第一。嶺南人^レのみどうして無^レ仏性のもものだけが集まるのだろうか。このことは理解できない。このうしたことに關しては、「これまでの各段に」理解すべき箇所が多くある。「第一段で」始めに「悉有」が「衆生」「である」といい、「それが」「仏性」「である」と聞^レいたことによつて、この「有」の字は、世間で用^レいるような「無^レに對する有」ではないと理解する。第二段の「欲知」といふのも「当知」と理解する。「若至」といい「不至」といふのは、「仏性の現前」と理解する。「超越因縁」「脱^レ体^ニ仏性」などと聞^レく。第三段に、「仏性海」を「山河大地、皆依建立、三昧六通、由^レ茲^ニ発現」(山河大地、皆依^レて建立し、三昧六通、茲^ニ由^レつて発現す)と説いて、海を「仏性海」と説き、「山河」と説く。「皆依ハ全依なり」といい、「建立なり。正当恁麼時」と呼び出して、「これは」「山河大地なり」といふ。「驢^レ馬^レ鬣^レ」をさして「仏性をみる」といふ。「六神通」とあげて「前三三後三三」と体脱^ス。第四段では、四祖が「汝何姓」と問^レい、五祖が「姓即有、不是常姓」と答^レえ、四祖はまた「是何姓」と問^レい、五祖は「仏性」と答^レえた。四祖はまた「汝無^レ仏性」とお答^レえになつた。有^レ無^レの全部は、すでにそれぞれ「の段」で明らかである。どんな疑問を残すことができようか。「すべて明らかである。」。これが第三。そのうえ、「この段には」「嶺南人は仏性ありといふにあらず、嶺南人無^レ仏性となり」とある。これが第四。また、「いかにしてか作^レ仏せむ」といふのは、「いかなる作^レ仏をか期するといふなり」とあるので、「いかなる作^レ仏も無^レ仏性であつて」残ると

無仏性トナリトアリ^是。又イカニシテカ作仏セムト云ハ、イカナル作仏ヲカ期スルトイフナリ(一一八b)トアレハ、ノコル所ナキヲ、今ヲロカナル学人、世間ノ執ニヒカレテ、忿忿^{ソウソウ}ニシテ不^ニ心得^ハ、アハレムヘキ物也^是。又一方心得ユヘキ所アリ、嶺南人皆仏性トキコユ、ソノユヘハ嶺南人無仏性トイフユヘニ、此無^ラ仏性無^ト心得ヘシ、嶺南人皆無^ラ仏性人ナレハ、イカニシテカ作仏セムトイハルヘシ、仏性ノ上又作仏ト不^レ可^レ談ユヘニ^是六、(一一九a)

ころがないのを、今、おろかな学人は、世間的な執著にひかれて、あわくだしく「この文を読み、正しく」理解しない。あわれむべき者である。これが第五V。また一方に理解されなければならない箇所がある。嶺南人皆仏性と思われる。そのわけは、「嶺南人無仏性」というのであるから。この「無」を、仏性の無と理解すべきである。嶺南人皆無仏性人であるので、「いかにしてか作仏せむ」といわれるのであろう。仏性の上に、また作仏と説くことができないのであるから。これが第六V。

(1) 『景德伝燈録』卷三 弘忍章

師問曰、汝自^レ何来。曰、嶺南。師曰、欲^レ須^レ何事。曰、唯求^レ作^レ仏。師曰、嶺南人無^レ仏性、若^レ為^レ得^レ仏。曰、人即有南北、仏性豈然。
(正蔵五一・二二三c)

『景德伝燈録』は必ずしもこの箇所と一致しない。傍線の部分に限れば、『六祖大師法宝壇経』には次のように記されている。

惠能曰、人雖^レ有^レ南北、仏性本無^レ南北。獼猴身与^レ和尚^レ不同、仏性有^レ何差別。(正蔵四八・三四八a)

また、『建中靖国統燈録』卷一 弘忍章には次のようである。

答曰、人有^レ南北、仏性豈有^レ南北。(統蔵一三六・二三三d)

(2) 『全集』は「ん」とするが、『聞書』(一一七b)によって「む」と改めた。

(3) 『抄』(一〇九a)には「嶺南人無仏性也」とあって「と」を欠く。また『聞書』(一一五a)も「嶺南人無仏性トナリ」とあるが、「ト」を削除すべきことを指示している。しかし総持寺本・玉林寺本・万福寺本(『蒐成』二二・二二c)の『聞書』には「と」があるから、削除しないこととした。

(4) 『全集』は「ん」とするが、『抄』(一〇九b)によって「む」と改めた。

(5) 『全集』・『抄』(一〇九b)は「せ」とするが、『聞書』(一一五a)は「ス」とする。ここでは「せ」とし、『聞書』の口語訳では「せ」と改めた。

(6) 『全集』は「構」とするが、『抄』(一一一b)によって「構」と改めた。

(7) 『全集』は「偶」とするが、『抄』(一一二a)によって「隅」と改めた。

『正法眼蔵抄』口語訳の試み(伊藤)

- (8) 『全集』は「転」とするが、『抄』(一一二a)によって「伝」と改めた。
- (9) 『全集』は「ん」とするが、『抄』(一一二b)によって「む」と改めた。
- (10) 『全集』は「ん」とするが、『聞書』(一一七a)によって「む」と改めた。
- (11) 『全集』は「お」とするが、『抄』(一一三b)によって「を」と改めた。
- (12) 『正法眼蔵』画餅の巻には、「一法纒通万法通」(『全集』上 二二〇頁)とあり、『抄』は次のように註釈している。
一法纒通万法通ノ詞ヲ心得ニハ、一法ヲタニ能能アキラメ心得ヌレハ、此理諸法ニワタリテ相通スル也、ユヘニ爾云也ト思ヘリ、
実一往サル理モアリヌヘケレトモ、是ハ未ヲチツカサル理也、ソノユヘハ、アキラムルトキノ一法、未^レ明トキノ一法アリテ、キ
コユ、背^ニ仏法理、是ハ一法カ万法ニテアリ、万法カ一法ナル道理ヲ、一法纒通万法通トハ云ハルル也、努努多少ニカカハラス、
一法ニ通シテ、此力ニテ余法ヲモ通ヘント云ニハアラヌ也、(『蒐成』一二・三〇八b)三〇九a)
- (13) 次のように、同文が現成公按の巻の『聞書』にもある。
(前略) 此事ハ仏在世ハ人ノ機ヲシロシメシテ随^レ機テ説法シマシシカトモ、彈呵淘汰ノ調熟ヲヘテ、機ヲ一円ニトトノヘマ
シマスモノナリ、(『蒐成』一一・三六a) b)
- (14) 「前三三後三三」については、都機の巻の初頭の文を『抄』は次のように註釈している。
諸月の円成すること、前三三のみにあらず、後三三のみにあらず。(『全集』上 二〇六頁)
諸月ノ円成スルト云ハ、尽十方界諸月ナル道理ヲ云也、ユヘニ前三三後三三トイハル、是則不^レ拘^ニ数量、円満満足詞ナリ、(『蒐
成』一二・二八四a)
- (15) 「已来」とあるが、『抄』(一一〇b)及び『聞書』の他の箇所(一一五b)には「以来」とあるから、訳では「以来」と改めた。
- (16) 「サラムヤ」とあるが、『抄』(一一二b)は「サラム」とするから、訳では「ヤ」を除いた。
- (17) 「曰」とあるが、『抄』(一〇八b)は「トフ」とするから、訳では「とふ」と改めた。
- (18) この「印は不要と思われるので、訳では除いた。
- (19) 悉有の言は、衆生なり、即有也。すなはち悉有は仏性なり、悉有の一分を衆生といふ。(『論集』第一五号、一七〇頁)
- (20) 時節因縁漸耳なり、超越因縁なり。(中略) いはゆる欲知仏性義は、たとへば当知仏性義といふなり。(中略) 若至は既至といはんがご
とし。時節若至すれば、仏性不至なり。しかあればすなはち、時節すでにいたれり。これ仏性の現前なり。(『論集』第一五号、一九二頁)
- (21) 第十二祖馬鳴尊者、十三祖のために仏性海をとくことばにいはいはく、山河大地、皆依建立、三昧六通、由茲発現。しかあればこの山河大
地、みな仏性海なり。皆依建立といふは、建立なり。正当憍麼時、これ山河大地なり。(中略) 仏性をみるは驢驘馬猪をみるなり。さ
らに内外中間にかかはるべからず。憍麼ならば、皆依は全依なり、依全なりと、会取し不会取するなり。(中略) 六神通はただ阿笈摩
教にいふ六神通にあらず、六といふは、前三三後三三を六神通ハラ蜜といふ。(『紀要』第四三号、一一七頁)
- (22) 祖見問曰、「汝何姓」。師答曰、「姓即有、不^ニ是常姓。」祖曰、「是何姓。」師答曰、「是仏性。」祖曰、「汝無仏性。」(『論集』第一六号、一
五四頁)